



我が恩師、福原黎三先生

高校 12 回 松本光広

普段甘利本を読まない私の6年生になる末娘が久しぶりに熱心に本を読んでいた。どんな本かと思って尋ねてみると、先日学校で見に行った映画の元になった本で“飛べ！千羽づる”という広島で原爆にあった小学生の短い一生についてのものであった。私もどんなものかと思い書出しを読んでみると何か心に引っ掛かるものがあり、またその本に引き込まれ、夢中で一気に最後まで読んでしまった。多分小学生の必読書になっているのであろう。そう難しいことが書いてあったわけではないのだが、その本で扱われていることが私にとって心に大切にしまっておいたものを呼び起こされた。多分、人の一生にはこのようなことがきっとあるに違いない。

その本で扱われていた原爆、放射能、第二次被爆、白血球、原爆手帳、これらの言葉に通じるのはやはり我が恩師、福原黎三先生のことである。広島に原爆が投下された時は昭和6年4月2日生まれの先生にとっては14才の

時で、その時先生は広島市から2～30km離れた八本松という田舎に住んでいたそうで、そのため直接原爆の被害には合わなかったそうである。しかし、その翌日広島市内に住んでいた兄の公昭さんの消息を尋ねて被爆の跡地に踏み入れたそうだ。二日間の搜索の末やっと遺体となったお兄さんをハナワジマというところで探し当てたという。この直接の被害には合わなかったが、原爆が投下された直後に放射能が残る被爆の跡地に行った人を第二次被爆者というのだそうだ。娘が読んでいた本の主人公の佐々木禎子さんは福原先生よりもっと多く放射能をあびていたようだが、第二次被爆者であった。いずれにしろ二人とも原爆による放射能をあび、“飛べ、千羽づる”の主人公は12才の人生を既に終え、そして私の恩師福原黎三先生は昭和45年2月27日胃ガンで38才の短い一生を終えている。二人に共通すること、それは被爆である。

私の中には48才を数えようとする

今も数え切れないほど先生から受けた影響と思い出がいっぱい詰まっている。自分でも不思議に思えるほどである。一人の人間が他の人間にこれほどまで大きな影響力があることを知っただけでも私はこの人と出会えて良かったと思っている。

私が安行中学校から浦和高校に進んだのは昭和 32 年のことであった。やっとのことでの入学であった。安行はその頃片田舎で浦和高校への進学は冒険でしかなかった。ましてや組織だったスポーツ活動など行われてもいなかった。それが高校へ入ってサッカーを始めることになるのにはいくつかの理由があったが、一旦サッカー部に入ってサッカーを続けるにあたっては、福原黎三先生との出会いを抜きには考えられない。

先生が浦和高校に奉職したのは昭和 31 年 4 月のことで、私が高校に進む一年前のことであった。広島鯉城高校からサッカーがやりたくて東京の大学を志望し、いくつかあった入学口から東京教育大学に進み、二年次には関東大学サッカーリーグ戦で優勝している。160cm そこそこの先生がセンターフォワードのポジションで活躍されたとのことであるが、選手が大型化した現在では考えられないことである。先生の高校時代については私が接した方々からはあまり聞くこと

が出来なかったが、先生と同じ東京教育大学に進んだ私は先生の大学 4 年間のサッカーにかけた情熱や生活上のエピソードをいろいろな方からたくさん聞くことができた。

数えてみると私が出会った時先生は 26 才であったはずだ。それから 3 年間、先生の年令でいくと 26、27、28 才このわずかな時間に私が先生から受けた感化は大変なものであった。いつも不思議に思えるのは、先生のこの年令の時自分が受けた先生の感じと自分がその年令の時の差である。行ったり、考えたりしていたことには少なくとも 2、30 才の開きがあったように思えてならない。先生の常日頃おっしゃっていたことが今この年になってやっとなんか分かってきたようなことがたくさんある。その一つに“サッカーで哲学しろ”ということがあった。先生のおっしゃっていた意味と現在自分が感じていることと一致しているかどうかは定かではないが、少なくともあの年令ではそれも高校生に向かってあのようなことを云っていた先生は自分なりに何か持っていたのだと思わずにいられない。

一例を挙げるならば、先生はよく“自由と規律”ということ言われていた。今、私が人を教える立場にいて、サッカーを通して何が教えられるかと考えた時、この”自由と規律“とい

うことの大切さをしみじみと感じている。サッカーには攻撃すなわち自チームがボールを持ったときと守備すなわち失った時の二つの局面しかない。攻撃すなわち自チームがボールを持ったときは自由にあらゆる手段を駆使して相手のあらゆる抵抗を乗り越えてゴールという最終目標に向かって邁進することが要求される。反対に守備すなわち自チームが一旦ボールを失ったら直ちに相手の前進を阻み、相手からボールを奪うためにみんな結束し、協力し、考えを一つにして行動しなければならない。そこには個人の自由はなく規律に支えられた全体行動がなければ到底ゴールを守り、ましてや相手ボールを奪うなどということとはできない。この二面性を理解したチームが真のサッカーをやることができると思う。

私達の同級生は先生の影響かもしれないが現在もサッカーに携わって

いるものが多い、私事で申し訳ないが、同級生の中でも最も遅くサッカーをはじめ、自分ではあまり上手くなかったと思っていた私が現在は大学のサッカー界にあっては上位にランクされる筑波大に勤務し、サッカー協会の仕事をもう二十数年やらせてもらっている。その間ロンドンに移った伊藤庸夫君とペルーのリマに移った竹嶋住夫君が協会の国際委員として活躍するようになった。いずれにしろ私達もそう若くはない。今、2002年のワールドカップを目指して日本サッカー協会は動き出そうとしている。その時は何らかの形で日本のサッカーのために尽くしたいと希望している。先生の意志を継ぐとともに、浦和のサッカー、埼玉のサッカー、日本のサッカーの発展を願ってやまない。

“球苾院一導居士”これが先生の戒名である。

ご冥福をお祈りします。 合掌